The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	舞踊における「ヴァリエーション」技法の変遷 : ダンス・クラシックからポストモダンへ
Author(s)	譲原, 晶子
Citation	大阪大学, 2014, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/51847
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（譲原晶子）	
論文題名	舞踊における「ヴァリエーション」技法の変遷：ダンス・クラシックからポストモダンへ

ワガノワ、チェケッティその他過去の多くの著作に見るように、バレエの様式はこれまで、もっぱら身体動作の規律、技法として記述され、認識されてきた。これに対して本論文は、バレエ用語（言葉）の成り立ちを分析しその表現システムとしての仕組みを解明することで、構成法compositionという観点からバレエの様式が本来もつ創造的側面に光をあてる。そして、「バレエとは言葉を基盤に舞踊語彙（動きの語彙）を構築するための方法論である」という本論文の仮説を検証し、この方法論の現代的意義を問う。

論者が西洋芸術舞踊における「言葉」の役割に注目するようになったのは、ヨーロッパの創作バレエおよびコンテンポラリーダンスの活動現場で行なったフィールドワークがきっかけである。現場観察を通して論者は、バレエの実演形態は時代とともに大きく変貌したのに対してバレエ用語の用法は17 世紀の王立舞踊アカデミー以来本質的に変化していないこと、コンテンポラリーダンスの創作法のいくつかは基本的に古典バレエのヴァリエーション技法を踏襲していることに気づき、「言葉」を軸に、17世紀の宮廷舞踊から現代バレエ、コンテンポラリーダンスまでを貫く西洋芸術舞踊の理論を展開するという構想を得た。本論文は、バレエとは本質的に変容する舞踊であり、その様式としての同一性は用語と思考システムの不変性により保たれるという見方から、バレエの思考システムはどのようにして表現システムとして成立するのかを明らかにするとともに、このシステムが現代の西洋芸術舞踊に対してもつ意義を論ずる。主な論点は次の三つに絞られる。①17世紀来伝承されるバレエ用語の用法および思考システムの成り立ちを示す（バレエ言語の構造研究）。②バレエが実演レヴェルにおいて変容してきたその変化の様相を示す（バレエ言語の歴史的変遷の研究）。③バレエ言語のシステムが20世紀の新しい舞踊において創作技法として応用されたことを示し、それがどのように応用されたのかを明らかにする。

論文は四部構成からなる。第一部「20世紀的視座からバレエを捉えなおす」では、本論文の議論の下地となる次の三つの事項を扱う。一つ目に、二つのキーコンセプト「プリスクリプション」と「ヴァリエーション」を導入する。舞踊制作で使用される「言葉」とは、舞踊実演を厳密に規定、記述するよりもそれを喚起する言葉であり、「プリスクリプション」は後者を前者から区別する概念である。「ヴァリエーション」は、バレエの思考システムの中核をなす本論文の中心テーマであり、論文冒頭ではまずこれを、原型を特定の変形法で変形すること、またそれによって得られる変化形、と定義する（しかし、最終章に至るまでには、ヴァリエーション技法が含む「言葉（プリスクリプション）＋身体（実演の試み）→多様な実演形式＝ヴァリエーション」という過程に注目し、これに重要な意味を見いだしてゆくことになる）（第１章）。二つ目として、バレエ用語を分析する際に本論文が依拠するアン・ウィリアムスのバレエ理論について、これが誕生した時代背景および彼女の思想的背景を明らかにし、本論文がこれに依拠する根拠を示す（第２章）。三つ目に、「舞踊創作ではなぜ舞踊譜（テキストとしての作品）は使用されないのか」という第１章で立てた問いに加え、「なぜ20世紀末の舞踊作家たちはスクリプトを用いて創作するようになったのか」という問いに答えることで、その制作過程の特質、制作メディア（言葉と身体）の特殊性を浮き彫りにする。そしてそれを通して、舞踊創作における「言葉」の位置づけを明らかにする（第３章）。

第二部「バレエ用語からみた動きの構成法――バレエという名の思考」では、バレエ用語およびバレエ言語（動きの言語）の構造分析を行なう。分析は、ウィリアムスの理論を参照しながら論者独自の方法を用いる。まず、パを記述する用語を「パの名称」（assemblé, jetéなど）と「限定語」（dessus, en dehors, développéなど）に分け、パはこの二種類の用語の組み合わせによって記述されること、そしてバレエ言語の語彙体系はヴァリエーション・システムにより論理的に構築されること（17世紀の王立舞踊アカデミー以来この方法で記述されてきたこと）を示す（第４章）。次に、これらの用語のうち、「パの名称」は動きに「意味」を与え、「限定語」は動きの「形式」を規定することを指摘し、バレエのヴァリエーション・システムとは同一の意味内容に多様な形式を与えるシステムであることを示す（第５章）。さらに、「パの名称」の語形――動詞の過去分詞形（assemblé）、固有名詞（pas de Basque）、普通名詞（pas de chat）――はパの誕生時期および寿命と密接に関わることを指摘し、最も古くかつ長寿命の「動詞の過去分詞形」の名称を

もつパをとりあげその実演形態の変容を辿る。また、バレエ用語としての動詞の過去分詞形はもともとは「限定語」として使用され、その後「パの名称」として固有名詞化されたものであることも指摘する。こうして、パの誕生、変容において「言葉（プリスクリプション）＋身体（実演の試み）→多様な実演形式＝ヴァリエーション」の過程が踏まれたという解釈が可能になる。バレエの動きが時代とともに新たな意味と形式を獲得していく過程において、バレエ用語（動詞の過去分詞形）およびヴァリエーションのしくみが果たしてきた役割がここに示唆される（第６章）。

第三部「実演形式からみた動きの構成法とその変容――バレエという名の身体運動」では、バレエの実演形態の変遷を、過去に書かれた種々の舞踊譜を解読することで明らかにする。舞踊譜は、録画技術誕生以前の時代において、舞踊実演の実体を最も直接的に示す記録である。ハッチンソン・ゲストおよびイェシケは舞踊史に見いだされる40種以上の記譜法を収集し、解読の研究に取り組んだが、本論文ではそのなかから時代の異なる五つの記譜法を選び、同一名称のパがそれぞれどのように記譜されているかを比較することで、身体／実演レヴェルにおける舞踊構成法の変遷を読みとることを試みる。そこには、西洋舞踊の関心が身体造形へと向かい、身体を舞踊制作の素材としてメディア化していったその過程を認めることができる（第７章）。さらに、「クペcoupé」「タンtemps」「アチチュードattitude」といったバレエの基礎概念のもつ意味が時代とともに変容する様相を文献記述を手がかりに詳細に辿ることで、第７章において舞踊譜から読みとった舞踊実演の変化の方向性を、基礎概念の変遷という側面からも裏付ける。すなわち、舞踊分節法の変化により「パ」の概念は19世紀に至るまでには実質上弱体化されたこと（第８, ９章）、そして20世紀には「タン」「アチチュード」の概念も弱体化されてしまったこと（第10, 11章）を示し、舞踊創作が身体の（ヒトとしてよりも）モノとしての可能性を開拓しようという方向へと進んだその様相を明らかにする。そして、まさにそれを通して20世紀バレエが花開き、また現代舞踊の構成法の下地が形成されていったのだと、第四部のテーマへとつなげていく。

第四部「20世紀における舞踊構成法」では、ポストモダンダンスおよびコンテンポラリーダンスの舞踊作家たちが作品創作にあたって作成したスクリプトをとりあげ、彼らの創作の方法論について具体的に検討する。まず、これらの舞踊作家たちが自らの方法論を語るのに、揃って表現舞踊の創始者ルドルフ・ラバンの理論に言及していることに着目し、ラバンの「シュリフトタンツ」「キネスフィア」の概念と彼らの方法論との接点を明らかにする。そしてその上で、これら20世紀の舞踊構成法が発展してゆくその淵源がラバンの思想にあることを示す（第12章）。次に、具体的な考察対象として、ポストモダンダンサーと呼ばれる人たちのなかからブラウン、パクストン、カニングハムの創作法をとりあげる。彼らのスクリプトにおける新機軸は、作品として確定された身体運動を記述するのではなく、作品を立ち上げるための「手続き」を記すことにある。舞踊家の即興実演（「言葉（プリスクリプション）＋身体（実演の試み）→多様な実演形式」）を通して彼らは作品創作を行なったが、このとき振付家の役割は「舞踊を構築する」ことから「舞踊を引き出す」ことへと移行している（第13章）。続いて、ヴァリエーション技法（「原型＋変形概念→ヴァリエーション」）を用いて創作する現代の舞踊作家として、フォーサイス、ドゥ・メイ、ドゥルレールをとりあげ、彼らの方法論とバレエのヴァリエーション・システムとの共通点、相違点の比較を行なう。相違点としてまず挙げられるのは「原型」および「変形概念」の内容の違いであるが、最も重要な相違点は、この二項を確定的にではなく「手続き」として設定しているということであり、それにより「言葉（プリスクリプション）＋身体（実演の試み）→多様な実演形式」の過程をヴァリエーション技法の中心に位置づけているという点である。これによって、フォーサイスはバレエにおける即興を成立させている（第14章）。

以上の議論を通して次の結論が導かれる。20世紀に至るまで、バレエは豊かな舞踊語彙を形成し一大舞踊言語として発展してきた（その全貌はバレエ用語の構造分析で把握された）。その一方で、20世紀には、バレエの技術が舞踊家の全身を覆いつくし洗練しつくすことで行き詰まりをみせ、これを打破しようと新しい舞踊言語が求められた。そのとき、「バレエの動きの形式を変容、変形させるしくみ」であり「バレエ語彙を体系化するしくみ」であったヴァリエーションの原理が、「表現の技法」「創作の技法」として、20世紀の舞踊家たちにより読み替えられた。創作という文脈におかれたとき、ヴァリエーションは変形技法であるよりは「言葉が身体に働きかけ舞踊を引き出す技法」となり、これによってバレエは「言葉を基盤に舞踊語彙を論理的に構築する方法論」としてその創造的側面を浮き彫りにしたのである。そして、技法を手にした現代の舞踊家たちは、表現、創作の名のもとに、「メディア作家」たらんと舞踊言語を自ら構築しようとしているのである。

本論文では、用語とスクリプトそして「ヴァリエーション」の概念を軸に西洋芸術舞踊の歴史を辿ることで、現代の舞踊と17世紀来の伝統的バレエとのつながりを明らかにした。現在バレエといえば舞踊家が習得すべき身体技術とみなされており、それは実は振付家が駆使すべき表現の体系でもあるのだという意識は、創作の現場においてすら欠如している。本論文における議論が、これまで注目されてこなかったバレエが本来もつ創造的側面を照らし、舞踊芸術の現在を未来へと繋げていこうとする人々に何らかのヒントを与えるものであることを、願ってやまない。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　譲原　晶子　）			
論文審査担当者	（職）		氏　名
	主 査	大阪大学　教授	永田靖
	副 査	大阪大学　教授	上倉庸敬
	副 査	大阪大学　名誉教授	市川明
	副 査	大阪大学　准教授	中尾薫

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式 7 別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　舞踊における「ヴァリエーション」技法の変遷：ダンス・クラシックからポストモダンへ

学位申請者　譲原　晶子

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　永田靖

副査　大阪大学教授　上倉庸敬

副査　大阪大学名誉教授　市川明

副査　大阪大学准教授　中尾薫

【論文内容の要旨】

本論文は、バレエ用語（言葉）の成り立ちを分析しその表現システムとしての仕組みを解明し、構成法という観点からバレエの様式が本来もつ創造的側面に光をあてている。論文は四部構成からなる。第一部では、本論文の議論の前提となる二つのキーコンセプト「プレスクリプション」と「ヴァリエーション」を導入し、この概念の西洋舞踊芸術における意義を深く洞察した上で、「原型＋変形概念→ヴァリエーション」という手続きで変化形をつくることとの過程に重要な意味を見出だした。またバレエ用語を分析する際に本論文が依拠するアン・ウィリアムスのバレエ理論について、これが誕生した時代背景および彼女の思想的背景を明らかにし、本論文がこれに依拠する根拠を示した。さらに、舞踊創作において言葉と舞踊譜の重要性を再考した上で、舞踊創作における「言葉」の位置づけを明らかにした。第二部では、ウィリアムスの理論を参照しながら、パを記述する用語を「パの名称」と「限定語」に分け、パはこの二種類の用語の組み合わせによって記述されること、そしてバレエ言語の語彙体系はヴァリエーション・システムにより論理的に構築されることを示した。また、これらの用語のうち、「パの名称」は動きに「意味」を与え、「限定語」は動きの「形式」を規定することを指摘し、バレエのヴァリエーション・システムとは同一の意味内容に多様な形式を与えるシステムであることを明らかにした。さらに、「パの名称」の語形、つまり動詞の過去分詞形、固有名詞、普通名詞などは、パの誕生時期および寿命と密接に関わることを指摘し、最も古くかつ長寿命の「動詞の過去分詞形」の名称をもつパをとりあげその実演形態の変容の実体を明確にした。その結果、パの誕生、変容において「言葉＋身体（実演の試み）→多様な実演形式＝ヴァリエーション」の過程が踏まれたて来たことを明らかにした。

第三部では、バレエの実演形態の変遷を、過去に書かれた種々の舞踊譜を解読した。舞踊史に見いだされる 40 種以上の記譜法のなかから時代の異なる５つの記譜法を選び、同一のパがそれぞれどのように記譜されているかその違いを比較することで、身体／実演レヴェルにおける舞踊構成法の変遷を読みとることを試みた。そこでは、西洋舞踊の関心が身体造形へと向かい、身体を舞踊制作の素材としてメディア化していったその過程を認めることができた。さらに、「クペ」「タン」「アチチュード」といったバレエの基礎概念のもつ意味が時代とともに変容していくその様相を文献記述を手がかりに詳細に辿ることで、舞踊譜から読みとれる実演実体の変化の方向性を、基礎概念の変遷という側面からも裏付けることを試みた。すなわち、舞踊分節法の変化により「パ」の概念は 19 世紀に至るまでには実質上弱体化されたこと、そして 20 世紀には「タン」「アチチュード」の概念も弱体化され

てしまったことを示し、舞踊創作が身体の（ヒトとしてというよりむしろ）モノとしての可能性を開拓しようという方向へと進んだその様相を描きだした。第四部では、ポストモダンダンスおよびコンテンポラリー・ダンスの舞踊作家たちが作品創作にあたって作成したスクリプトをとりあげ、それらをもとに彼らの創作の方法論について具体的に検討した。ルドルフ・ラバンの「シュリフトタンツ」「キネスフィア」の概念と彼らの方法論との接合点を明らかにした上で、カニングハムやフォーサイス、ドゥ・メイ、ドゥルレースをとりあげ、彼らの方法論とバレエのヴァリエーション・システムとの共通点、相違点の比較を行なった。その結果 20 世紀には、バレエの技術が舞踊家の全身を覆いつくし洗練しつくすことで行き詰まりをみせ、これを打破しようと新しい舞踊言語が求められたが、「舞踊語彙を体系化するしくみ」であったヴァリエーションの原理が、「表現の技法」「創作の技法」として読み替えられ、ヴァリエーションは変形技法であるより「言葉が身体に働きかけ舞踊を引き出す技法」となり、バレエは「言葉を基盤に舞踊語彙を論理的に構築する方法論」としてその創造的側面を浮き彫りにしていることを明らかにした。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、バレエの技法の変遷をクラシック・バレエから現代のコンテンポラリー・ダンスまで辿りつつその変質の様相を、バレエ用語の成り立ちを分析することで、その核心的な部分を明らかにしようとする論考である。従来、舞台上の作品の歴史であったバレエ史を制作者の観点からバレエ用語の詳細な分析を通じて、通史的な概観を得ようとする野心的な試みである。

アン・ウィリアムスのバレエ理論について、その時代背景から説き起こし、二つのキーコンセプト「プレスクリプション」と「ヴァリエーション」が導入された後に、バレエ用語の中でも、とりわけそのもっとも基本的な「パ」についてその記述する用語を「パの名称」と「限定語」に分け、パはこの二種類の用語の組み合わせによって記述されること、そしてバレエ言語の語彙体系はヴァリエーション・システムにより論理的に構築されることが明らかにされた点、また「パの名称」は動きに「意味」を与え、「限定語」は動きの「形式」を規定することを指摘し、バレエは一定の約束事に則りながら、同時にその意味内容に多様な形式を与えるシステムであることを明らかにした点は、極めて独創的で、単にバレエの解析のみならず、約束事の強固な他のジャンルの分析にもその応用を考えることのできる観点であると考えられる。またバレエの実演形態の変遷について、過去に書かれた種々の舞踊譜を解読することで身体／実演レヴェルにおける舞踊構成法の変遷として読み解いており、「クペ」「タン」「アチチュード」といったバレエの基礎概念のもつ意味が時代とともに変容していくその様相を文献記述を手がかりに詳細に辿り、舞踊譜から読みとれる実演形態の変化の方向性を、基礎概念の変遷という側面からも裏付けたことも高く評価される。さらには 20 世紀バレエの展開の中で、これらの概念が実体的に弱体化して行く様相をも理論的に跡付けており、現代バレエ全体の技法上の変容を描き出した点も評価される。

ただ、バレエ史においてバレエ用語の果たした機能は時代によって変化があること、個性の発露であったかもしれない振付家の舞踊譜を時代の典型として歴史化すること、バレエ創作において形式と言葉を弁別することには限界があることなどについての議論が不足していることが指摘された。また舞踊の様式から抽出した技法を身体訓練方法にする際には、その源泉となった様式の文脈を捨象していることが多いという歴史的事実についても、広範なバレエ史を構想するためには、さらに明らかにするべきことなど、今後の課題を残した。

しかし、これらの難点はあるものの、本論文は全体として見た場合、バレエ用語を分析するという観点からバレエの技法全体を見渡し、クラシックから現代まで通底する新しい見方を示し得たという独創的な点は、高い評価が与えられると考えられる。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。